される医療が大切な（日野原・高代ら）。近代医学はこのことを忘れて人の疾病に診断・治療・予後にいて時に誤りを犯しかねない。心身医学はハイエンドとアートの均衡を求めるので、医師の意味・位置づけを技術の可能性を考えた。

私の症例を検討すると認知療法と関連する脳内イメージの播種が大切で、医師・患者関係での対話交流も利用される。

癒やしの効果はQOLの自己評価とWare方式のSF36評価尺度による客観的評価をもってするが、治療者の全体的な影響がプライオリティを決定するようだ。

5. 当院心療内科における作業グループの機能について
東邦心療内科
○岩崎 麻美 土屋 洋子 久松 由華
中野 博子 佐々 好子 高橋 晶
波多野美佳 端詰 勝敬 坪井 康次

当科では、作業を通じて安心感を得る場として、週1回1時間半の手芸・コースなどの作業グループを行っている。対象は参加意思があり、身体管理上問題のない当科在籍中の患者である。1999年10月〜2001年3月までの登録患者は40名、平均年齢22歳、摂食障害女性患者が65%であった。参加者は長期参加員（28〜42回、3名、8%）、中間参加員（5〜10回、20%、8名）、短期参加員（1〜4回、29名、72%）に分けられ、入院中の短期参加が中心となった。グループ短期参加の意義は、患者が自己治癒能力を得ることができ、気分転換、自己評価の向上、対人交流の経験を得ることができることだと思うられる。また、治療者は患者の適応可能な部分を見出し、新たな介入方法への手がかりを得、治療関係作りのきっかけをみつけることになったと思われる。

6. 当院入院患者におけるコンサルテーション
篠ノ井総合病院精神科
○大村 薫子

当院入院中に当科に紹介された患者のコンサルテーションの状況について調査し検討した。対象は1999年1月〜2000年12月までの2年間に当科紹介となった158名である。

やや女性が多く、60歳以上が約7割を占めていた。紹介科は内科ももっとも多く、次いで整形外科、脳外科、外科の順番であった。紹介患者全体では、不穏や異常状態に泥紹介される症例が約半数であった。診断で一番多くたのは脳器質性障害であり、その中でも精神障害やめやすの占める割合が多かった。そして、紹介患者の身体状態が科によって異なることから、さまざまな特徴が科別に認められた。

コンサルテーションされる症例の紹介理由はきまざまであり、どの症例も紹介してきた主治医や看護スタッフの意図を汲み取りながら、適切な対応をしていくことが現在の課題である。

7. 心療内科（心身相関）外来でのうつ状態
長野県東部町立ひまわり病院心療内科
○森 孝宏

目的：新患外来では心身相関を指標とするうつ状態合併身体疾患より、圧倒的にうつ状態を主とする患者が多い現状を見出した。方法：1999年11月〜2000年10月まで1年間に当科受診した新患66例を検討した。結果：主にうつ状態が診断される症例は32例（48%）であり、一方、心身相関の観点からうつ状態にアプローチできた症例は8例で新患全体の12.2%、うつ状態症例の25%に相当し意外と多く、それらの身体転帰は神経症性過食症4例、過敏性腸症候群2例、糖尿病1例1.5%、慢性胃炎1例1.5%だった。まとめ：新患患者の約半数はうつ状態であった。一方、新患の12.2%にうつを伴う身体疾患がみられ、うつ状態はこの点で心身相関学の重要なフィールドであると考えられる。研修を行って対応していくたいと考えている。

8. 心身相関が強く認められたアトピー性皮膚炎の1例
日本大丸松江病院心療内科
○石原呂素子 村上 正人 松野 俊夫

初診時37歳、男性、会社員、かゆい皮膚科でアトピー性皮膚炎の治療を受けていたが、顔面の搔痒感と精神的要因の関連を指摘され、当科併診を勧められ受診。初診時は頭皮・顔面の皮膚の苔癬化が著明であった。仕事上のストレスと症状悪化の関連を自覚していたため、心療内科医による身体的治療に加え、心身相関ある理解の深める目的で臨床心理士による面接を開始した。仕事上伴う症状悪化と休職による縁起を繰り返しながら自己主張できない抑制的な行動パターンに気づき、できない仕事は断るなどの行動変容